

の中心に ϕ 1mm以下の白色血栓が付着。この隆起から肛門側に向かって、蛇行する比較的太い静脈が連続していた。これらの内視鏡所見から動静脈奇形と診断した。2月9日血管造影検査-横行結腸に流入する右結腸動脈の分枝から造影早期相に蛇行する静脈が描出され、動静脈奇形と考えられた。ハイリスク症例のため16日コイルによる動脈塞栓術施行した。術後AVM描出されず。22日CF-横行結腸の隆起の高さは減じ、頂部の白色血栓と表面の細血管は消失。この隆起から肛門側に向かって蛇行する静脈も消失。23日から食事開始。24日退院となった。

4 悪性が疑われた出血性肝嚢胞の1例

佐野 文・宮下 薫・藍澤喜久雄
清永 英利・森岡 伸浩・小方 則夫*
渡辺 卓也*・本間 信之*

燕労災病院外科
同 内科*

嚢胞腺癌を疑う場合、血中CEA、CA-19-9の上昇や、画像所見が有用であるが、鑑別が困難な症例も存在する。今回経過観察中興味ある形態変化を示し、嚢胞腺癌が疑われた出血性肝嚢胞を経験したので報告する。

症例は56歳の女性で主訴は背部痛。2000年秋ころより右背部痛あり。2001年3月30日当院内科受診。肝右葉に14cm大の単純性嚢胞をはじめ多発嚢胞を認めた。この際CA19-9は正常であり、経過観察となっていた。以後経過観察していたが2005年1月CTで肝右葉の嚢胞にのみ、他の嚢胞とは異なり内容液が高濃度で樹枝状の部分をも認めた。嚢胞腺癌を疑われ2005年4月22日外科紹介された。4月26日右葉の嚢胞摘出術、および他の単純性肝嚢胞の開窓術を施行。迅速病理にて出血性単純性肝嚢胞と診断された。単純性肝嚢胞の癌化例、穿刺による播種の報告もあり、嚢胞腺癌が疑われる症例は切除術の適応があると考えられた。

5 C型慢性肝炎にInterferon α -2b, Ribavirin併用療法を施行し潰瘍性大腸炎の増悪を認めた1症例

井上 真・渡辺 卓也・原田 健右
本間 信之・小方 則夫

燕労災病院消化器内科

症例は55歳男性。平成3年5月よりC型慢性肝炎で当科定期受診していた。平成15年7月軽度の下血を認め、下部消化管内視鏡(CF)にて潰瘍性大腸炎も疑われたが、速やかに改善し確定診断に至らなかった。平成16年12月、高分化肝細胞癌に対しラジオ波焼灼療法(RFA)を施行した。平成17年1月20日よりPEG-IFN α -2b 100mg/weekとRibavirin 800mg/day投与開始。投与3ヶ月より再度、下血が出現し、CFでは直腸から下行結腸に活動期の潰瘍性大腸炎の所見を呈した。mesalazine 3000mg/dayとprednisolone 30mg/dayの内服を再開し、PEG-IFNを中止した。1日5-7行の下痢、鮮血便、全身倦怠感、下腿浮腫、食欲不振、-8kg/1ヶ月の体重減少を認め、5月初旬に入院加療とし改善した。IFN治療を契機に潰瘍性大腸炎が再燃したと考えられ、Interferon α -2bとRibavirin併用療法での報告は本例が本邦初であり報告する。

6 肝細胞癌治療におけるReal-time Virtual Sonography (RVS)の有用性

川合 弘一・五十嵐正人・須田 剛士
野本 実・青柳 豊

新潟大学教育研究院医歯学系
消化器内科学分野

【はじめに】Real-time Virtual Sonography (RVS)は、CT volume dataから超音波(US)断層面に対応するMultiplanar reconstruction画像を瞬時に作成、表示するシステムであり、近年臨床応用されている。

【目的】肝細胞癌(HCC)の局所治療におけるRVSの有用性につき検討する。

【対象】CTで描出されるが、USで認識できないHCC計10結節。

【結果】RVSにて7結節が認識でき、穿刺治療を行い得た。

【考案】USのコントラスト能やアーチファクトによる限界があるものの、RVSにより存在診断能と治療の正確性の向上が期待できる。

【結語】RVSは、超音波のみでは同定困難な肝細胞癌に対する局所治療に有用である。

7 肝動注先行後に原発巣切除可能となったS状結腸癌高度多発肝転移の1例

伊藤 裕美・船越 和博・井上 聡
新井 太・本山 展隆・秋山 修宏
加藤 俊幸・桑原 明史*・瀧井 康公*
太田 玉紀**・青柳 智也***

県立がんセンター新潟病院内科
同 外科*
同 病理**
信楽園病院消化器内科***

症例は67歳、男性。他院にてS状結腸の3型進行癌、多発肝、肺、リンパ節転移、腹膜播種と診断され、当科紹介となった。原発巣に通過障害はなく、すでに黄疸を認め、多発肝転移巣が予後規定因子と考えられたため、肝動注療法を優先させる方針とした。左鎖骨下動脈経由でGDA-coil法にてリザーバーを留置し、翌日より5-FU 500mg/24時間で肝動注を開始した。Day 1-5を1コースとし、計6コース施行した。肝機能は治療開始後速やかに改善し、画像所見でも多発肝転移は著明に縮小した。原発巣切除可能と判断し、S状結腸切除術を施行した。組織学的にはグリメリウス染色陽性の内分泌細胞癌であった。原発巣切除後もweekly肝動注療法(5-FU 1250mg/5時間)を継続した。高度多発肝転移を有した大腸癌症例に対して持続肝動注を施行し、肝不全を回避することができ、術前の肝動注療法は有用であった。

8 胆道系スクリーニング・精査におけるDIC-MDCTの有用性

内田 克之・小海 秀央・松岡 二郎
清水 孝王・島影 尚弘・草間 昭夫
岡村 直孝・田島 健三・高橋 達*
西原真美子**・榎田 圭介**

長岡赤十字病院外科
同 内科*
同 放射線科**

当院では、2003年11月からDIC-MDCTを用いて、胆道系疾患の精査・スクリーニングに胆道三次元画像・virtual cholangioscopyを作製し、応用可能か検討しております。症例は、71歳男性。糖尿病で加療中に繰り返す肝機能障害で、前医で検査を施行したところ、中部胆管狭窄を認めました。昨年9月に来院され胆道三次元画像・virtual cholangioscopyを作製し、病変部の精査を行いました。1ヶ月間の経過観察では狭窄部の大きさ・性状には変化を認めず、virtual cholangioscopyではpit構造の残存・胆管粘膜のamorphousな構造を認め、胆管癌を強く疑う所見が得られました。手術は2004年11月に行い、狭窄部を迅速診断した後に幽門輪温存脾頭十二指腸切除を施行しました。病理組織学的検索では、fm癌でした。DIC-MDCTによる胆道三次元画像・virtual cholangioscopyは、胆道系スクリーニング・精査に有用な可能性があります。

9 多用途細径ビデオスコープ(CHF-BP260)にて観察したIPMTの1切除例

中村 厚夫・坪井 清孝・八木 一芳
関根 厚雄・土屋 嘉昭*・太田 玉紀**
森 茂紀***

県立吉田病院内科
県立ガンセンター新潟病院外科*
同 病理**
信楽園病院消化器内科***

症例は60歳代男性。2004年10月他院での腹部CT、MRCPで膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMT)が疑われ2005年1月当科紹介、ERCPで主膵管の